

## 2014 年秋学期レポート

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業  
第 10 期留学奨学生  
山本綾乃

### Ohlone College

8 月 1 日に渡米してから早いもので秋学期が終了しました。紫外線の強い夏が過ぎ、心地よい秋が訪れ、気付けば冬がやってきました。ですが冬といえども、春と初夏のにおいがする快適な季節です。最近は不足していた雨が降り続き、カリフォルニア州フリーモント市はみどり色に染まっています。めぐりめぐる季節の中で、充実した留学生生活を過ごしています。

さて学習面と生活面に分けて、以下の通り報告させていただきます。

#### ○学習面

2014 年秋学期は、講義を 5 つ受けました。すべてろう学生のための講義です。

#### *DEAF-311-01*

##### *Intro American Deaf Culture*

このクラスは、アメリカ、スウェーデン、フィリピン、中国、日本の生徒が在籍しました。6 人と少人数で、仲間や先生との距離が近く、とても楽しく受講することができました。Tom 教授はとても表情豊かで、気付けばろう文化の世界に引き込まれていました。様々な国の学生が集まることで、それぞれの経験や価値観について話し合い、自分を見つめる貴重な機会を得ることができました。最も大きな発見は、ろう者の中にも様々なカテゴリーがあることです。今まで、ろう者はろう者、難聴者は難聴者とひとくくりとして捉えていましたが、経験や文化もみな違う当たり前さに気付きました。

#### *DEAF-189A-01*

##### *Intensive Univ Prep-Reading I*

英語を読むことに慣れていなかったため、読み方について丁寧に学びました。様々な文章を読むことを通して、英文が自然と目に入るようになりました。また単語を覚えるのに苦労しましたが、パワーポイントの視覚的な教材に助けられました。英語はただ目を動かすのではなく、目と手を活用して読むことが重要だと感じました。春学期はさらに多くの本を読むことに挑戦したいと思います。

### *DEAF-175A-01*

#### *IUPP Grammar I*

英語の構造を分解し、英文法について学びました。シンプルだと思われる英語にも複雑な構造があると知り、語学は奥が深いと感じました。中学高校の復習のようでありながらも、知らないことがたくさんあり、とても勉強になりました。英語を、ASLを通した英語で考えると、より理解できることに気付きました。

### *DEAF-188A-02*

#### *Intensive Univ. Prep-Writing I*

様々なテーマをもとに、エッセイを書きました。この際、英和辞典ではなく、英英辞典を使うことが推奨されました。自分の考えを英語でうまく表現できないもどかしさから、Nancy 教授にアドバイスを頂くことの繰り返しでした。拙い ASL で自分の考えを表現し、Nancy 教授からこの表現はどうかと提案して頂きました。自分の考えに近い英語表現に出会った喜びは何とも言い難いほど大きいです。Nancy 教授の丁寧なフィードバックのおかげで、納得のいくエッセイを書くことができました。

### *DEAF-161-01*

#### *Intro to the Deaf Community*

このクラスもデフカルチャーと同様に、様々な国の学生が集まりました。日本、韓国、台湾、中国、アメリカ、メキシコ、ウクライナ。文化や年齢、経験など十人十色で、個性が強く感じられたクラスでした。講義は広く浅く、良く言えば幅広く学ぶことができました。英語と ASL、ろう文化を丁寧に指導して頂きました。デフカルチャークラスは前もって予習することが期待されていましたが、コミュニティは、クラスの中で英語の意味を一つずつ確認しながら進める形であったため、私にとってはデフカルチャークラスの予習あるいは復習となり、理解が深まりました。さらに毎回様々な情報提供があり、見聞を広めることができました。最終課題はムービー制作でした。テーマは、“国による手話の違い”。国も年齢も異なる仲間が協力してひとつの作品を作り上げました。

#### ○生活面

この半年間の目標は、アメリカでの生活に慣れることでした。渡米して一ヶ月間は、すべて初めての経験で戸惑いました。アメリカという未知の土地に足を踏み入れること自体、私にとって大きな挑戦でした。ホームステイといえどもアメリカは自立意識が高いため、一人暮らしの生活と同様です。勉強に加え料理や洗濯、掃除までもすべて自分でやる必要があります。日本では実家暮らしだったため、ここで一つずつ実行していくうちに、できることが増え嬉しいです。tutoring がない日はホームステイ先周辺を探検しました。青い空と白い雲、さらに夜の 8 時まで町を照らす太陽に励まされながら、前向きに過ごそうと努力する毎日でした。最近科学技

術が発達し、携帯電話や飛行機など、いつでもどこでも相手と連絡をとったり、好きな場所へ移動したりすることができる時代になりました。しかし、アメリカの広い大地を歩いていると、その広大さ、偉大さにちっぽけな自分の存在に気がきます。“ああ、世界は狭いようで、やっぱりまだまだ広いんだなあ”と自分の視野の狭さを実感するとともに、“さらに知りたい！学びたい！”という知的好奇心も膨らんでいきます。

カルチャーショックもいくつかありましたが、なんといっても部屋の天井に照明がなく薄暗いことでした。あの時の衝撃は今でも忘れられません。ある人の話によると、アメリカ人は目の色素が薄いため、薄暗い夜を過ごすのだそうです。しかし、勉強するための最低限の明るさは欲しいと考えたため、ホームマザーの協力を得て、明るいライトを部屋に置くことができ、解決しました。また、アメリカはきれいな町のイメージが強かったのですが、様々な側面があることに気がきました。あるアフリカ学生の話によると、アフリカもアメリカも同じ。マスコミは、美しい先進国、貧しい途上国を伝える傾向がありますが、実際はアフリカにも素敵な面があると教えてくれました。環境や文化の違いは、アジアの国に行った経験があるため、カルチャーショックはそれほどなかったのですが、アメリカの想定外の環境に驚きました。物事には必ず理由がある、それを考慮しつつ判断しようという視点に変わりました。

8月末から講義が始まり、新しい友達や先生と出会い、それまでの寂しさは薄れていきました。週末には友達と一緒に勉強や交流、イベントに参加して経験を共有しました。言語や文化、さらには性格の違いから、すれ違いもありましたが、時間をかけて話し合うことで理解し合う努力をしています。笑いや悩みのポイントは世界共通なのだと、驚きの中にも発見があり面白いです。Nancy 教授や Tom 教授に支えられながら、有意義な毎日を過ごすことができました。

最後に、アメリカでの生活に慣れるまでの一番大切な時期に支えて下さった日本財団のみなさま、ASL 協会のみなさま、Nancy 教授、Tom 教授、家族、先輩方、友達みなさんに心より感謝申し上げます。おかげで半年の間で多くのことを吸収することができました。今後さらに多くの学びや体験ができると思うと楽しみです。今後も奨学生であることを自覚し、いま自分に必要な課題を一つずつ丁寧に解決しながら、充実した留学生生活を過ごしていきたいと思えます。